

【原 著】

幼児のダウン症・知的障害への理解を援助する絵本教材

浅野 泰昌 山口（西岡）由稀 瀬戸山 悠 馬場 訓子

Picture Book Materials to Support Infants to Understand Down Syndrome and Intellectual Disabilities

ASANO Yasumasa, YAMAGUCHI (NISHIOKA) Yuki, SETOYAMA Yu, BABA Noriko

2024

岡山大学教師教育開発センター紀要 第14号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education  
and Development, Okayama University, Vol.14, March 2024

原 著

## 幼児のダウン症・知的障害への理解を援助する絵本教材

浅野泰昌※1 山口(西岡)由稀※2 瀬戸山悠※3 馬場訓子※4

ダウン症や知的障害に関する絵本は、物語を通じた障害の具体例の提示や感情表現など、障害そのものに対する理解にとどまらず、障害者やその保護者・兄弟の理解と支援につながる教材であり、より一層の充実が求められる。また、障害理解の教材としての絵本と幼児を媒介する保育者には、絵本を読み聞かせるだけでなく、保育現場の事例と照合させ、幼児に対する個別的な障害理解の深化を促す声掛けや働き掛けなどの援助が必要となる。本研究において作成された絵本リストは、保育者による絵本選択や障害理解教育を支援すると考えられる。今後の課題は、保育の現場実践での具体的運用と環境整備の検討及び、保育者と連携した妥当性の検証である。また、障害に関する絵本は、描写されるエピソードや使用される言葉や漢字表記等から児童期以降の子どもの想定したものが多いと考えられ、幼児期からの障害理解教育の有用性を踏まえ、幼児を対象とした絵本の増加が求められる。

キーワード：幼児期、障害理解教育、ダウン症、知的障害、絵本

※1 倉敷市立短期大学保育学科

※2 御南認定こども園

※3 くらしき作陽大学子ども教育学部

※4 岡山大学学術研究院教育学域

## I ダウン症・知的障害を主題にした絵本リストの必要性

障害理解には発達段階があり、それによって、幼児の気づきや疑問も異なると言われている<sup>(1)</sup>。幼児期の障害理解教育で絵本を使用することの妥当性は、読み聞かせによって、障害に対する幼児の気づきを誘発し、疑問を解決し得ることが指摘できる。これまで筆者らは、絵本を障害理解教育の教材として活用する有用性及び妥当性について検討し、指導における課題を示した<sup>(2)</sup>。そしてその上で、障害理解教育に活用できる絵本リストを作成し、それらの学びの要素や読み聞かせの際の留意事項等について考察した<sup>(3)</sup>。最終稿である本論では、ダウン症及び知的障害を扱う絵本に焦点を当て、これまでと同様に絵本リストの作成と、それらの絵本の学び要素や指導上の留意事項等について考察する。

幼児がダウン症児や知的障害児と関わる機会はその程度あるのだろうか。『保育白書 2023年版』によると、保育所においては、10年前と比較して2021年度の障害児受け入れ施設数は1.5倍(21,143施設)、受け入れ数は1.8倍(86,407人)に増加しており、公立保育所の91.0%、私立保育所の87.4%が障害児を受け入れていることが把握される<sup>(4)</sup>。障害児の受け入れが進むのに伴い、一定の

割合で見られるダウン症児や知的障害児の入園数も増加していることが推察される。障害児本人に対する支援に加えて、彼らと共に保育を受ける幼児に対するダウン症や知的障害への理解を援助することが求められ、そのための方法として、幼児の生活に関わりの深い絵本の活用が考えられる。

## Ⅱ ダウン症及び知的障害を主題にした絵本の調査

### 1 調査対象

調査対象の絵本は、これまでと同様に本論においても、岡山県立図書館及び岡山市立図書館が収蔵している絵本を収集、分析した<sup>(5)</sup>。その理由としては、①公立図書館には資料収集方針があり、蔵書は一定の基準を満たしているため信頼がおける、②作成した絵本リストで紹介する絵本は、誰でも気軽に探し求められる必要があり、一定の収蔵図書を有し利用者数の多い公立図書館は最適であることが挙げられる。調査時期は、2023年11月であった。

### 2 絵本の選定と分析の手続き

絵本の選定方法と分析の手続き、絵本リストの項目についても、これまでと同様である<sup>(6)</sup>。まずは絵本ガイド等を参考に、障害に関する絵本の情報を幅広く収集し、対象年齢、漢字や振り仮名の有無や難易度、ページ数、文章量等を判断基準とし、幼児期にふさわしいものを選定した。次に、その中で岡山市内の公立図書館に収蔵されている絵本に目を通して絵本を絞り込み、障害理解教育のねらいや内容に応じて分類した。リストには、「書名」「作者」「出版社」「出版年」に加え、指導の目的に合わせて絵本を選択しやすいように、簡単な内容等を示した。なお、このリストは本論末尾に資料として掲載した。さらに、各項目の代表的な絵本の内容から、それらの絵本の教育効果や指導上の留意事項等を考察した。

ここで、本論で扱うダウン症と知的障害の定義と特徴を示す。

#### (1) ダウン症の定義とその特徴

ダウン症は、出生児の中で最も頻度の高い染色体異常症である。発生頻度は、ほぼ新生児700人から1,000人に1人であり、母体年齢が上がるにつれてリスクが徐々に増大するとされている。染色体異常の多くは遺伝しないとされているものの、第1子がダウン症である場合や、高齢妊娠の場合には出生前診断として羊水検査による診断が可能であるが、その適応には、倫理的観点や検査自体の危険性も考慮し、慎重に行う必要がある。

篠原(2019)は、症状として、精神発達遅滞(知的障害)、筋緊張低下、頭部顔面異常、成長障害、心疾患等を挙げている<sup>(7)</sup>。ダウン症候群に見られる知的障害の程度には個人差があるものの、全般的にゆっくり発達していくことが多いことから、それぞれの実態に応じた関わりが求められる。

#### (2) 知的障害の定義とその特徴

DSM-5(2015)の定義によれば、知的障害(群)は、「発達期(おおむね18歳

まで)に発症し、概念的、社会的、および実用的な領域における知的能力と適応機能両面の困難を含む障害<sup>(8)</sup>となっている。『特別支援学校学習指導要領解説各教科等編(小学部・中学部)』(2018)によると、適応行動の困難とは、「他人との意思の疎通、日常生活や社会生活、安全、仕事、余暇利用などについて、その年齢段階に標準的に要求されるまでには至っていないことであり、適応行動の習得や習熟に困難があるために、実際の生活において支障をきたしている状態<sup>(9)</sup>」を指す。つまり、知能指数という個人の特性のみで判断するのではなく、環境との関係性の中で生じる能力障害であるという捉え方が主流になっている。

### Ⅲ ダウン症への理解を援助する絵本と指導の留意点

#### 1 ダウン症に関する基礎的な事柄を紹介する絵本

##### (1) ダウン症の原因

『わたしたちのトビアス』(資料1-①)(以降、本文中に取り上げる絵本に、本論末尾の資料に対応した番号を書き添える。なお、資料は出版年順に絵本を一覧化しており、本文中の資料番号は前後する)は、染色体が1つ多いというダウン症の原因を、「材料が多すぎても家が上手に建たない」と家の建築に例えながら説明している。「細胞」「染色体」といった言葉は、幼児にとって難しいと考えられるが、科学的に正確に説明されているのがこの絵本のよさである。それに対して、『わたしのおとうと、へん…かなあ』(資料1-⑤)では、幼児にとって明快な説明がなされている。この絵本は、染色体異常の弟をもつ主人公の視点から描かれている。「これじゃ、ドードは赤ちゃんのまんまよ! パパ、ママ、どうして? せつめいしてよ!」という言葉がある。それに対して、「とっても、おもい、びょうきに、なったの。だから、おとなになれないの。いつまでたっても、子どもなの」と答える。「おとなになれない」という表現は、正しい知識ではなく、誤解やダウン症児への子ども扱いを招く可能性がある。しかし、幼児に対して科学的に説明することが難しい以上、「とっても、おもい、びょうき」は、納得を得やすい表現である。

また、『となりのしげちゃん』(資料1-④)では、ダウン症児の母親に、隣の家の子どもが「なんで、…おしゃべりしないの? びょうきななの?」と単刀直入に尋ねる場面がある。母親の「…なんでも、ゆっくりおぼえていくから」という応えに対して、「どうして、ゆっくりなの?」と質問を重ねる。そして、分かりやすく納得できるまで説明する場面がある。その後、尋ねた子どもの「やっぱり聞いてよかったと、思いました」という言葉もある。このように、疑問に思っていることは気の済むまで尋ねてもよいというやり取りを見ることは、裏を返せば無関心にならないためにも大切であると考えられる。

##### (2) 写真を通じた顔貌の理解

ダウン症特有の顔貌を挿絵で表現した絵本は、どの絵本もダウン症の登場人物の表情や姿勢を工夫して描いている。しかし、写真以上に明瞭なものはない。

ダウン症について紹介する本は、写真で構成されたものが比較的多かった。徳田（2005）も、見慣れることで「障害や障害者に対するファミリーリティを高めること」<sup>(10)</sup>の重要性を主張している。写真であれば、絵よりもその目的を果たしやすい。作品としては、『学校つくっちゃった』（資料1-⑥）、『となりのしげちゃん』（資料1-④）、『ゆっくりって、いいな』（資料1-⑦）等が該当する。幼児期から児童期と年齢の近いダウン症児が主人公になっており、比較的親しみを感じやすいのではないかと推測される。実際に、『となりのしげちゃん』は、作者の後書きによって学齢期前の幼児を対象につくられた絵本であることが明言されている。

しかし、写真で構成された作品を幼児に読み聞かせるに当たって、事前に検討しておかなくてはならないことがあると考える。ダウン症のように顔貌が特徴的である場合、写真を見た幼児の反応は様々に想定される。仮に、自分との違いを敏感に察した幼児が、言語が未発達であるが故に、「どこか変だ」等と言った場合、周囲の幼児への影響を考えておかなければならない。その幼児が感じた差異を受け止めながら、「どうして変だと思うのか」ということを話し合い、「違っていてもよい」ということを幼児が理解できるように導くことができれば、より一層、障害理解教育が充実する。

### （3）言葉の不明瞭さ

野末（2020）は、ダウン症の場合、言葉の困難さは、筋緊張の低さや口腔内器官の形態の問題と抹消器官としての聴覚の問題とを関連づけて論じられることが多いことを指摘している<sup>(11)</sup>。その他、石田（1999）は、音韻認知や聴知覚などの問題等に言及している<sup>(12)</sup>。こうしたことを踏まえて、野末（2020）は、日常的なコミュニケーションを行う際に、表出言語の少なさや構音障害により伝えたいことが伝えられない場面につながる可能性について触れている<sup>(13)</sup>。言葉の不明瞭さについての理解を援助する絵本としては、次の作品が挙げられる。『わたしのおとうと、へん…かなあ』（資料1-⑤）では、療育の様子が少し紹介されており、姉と一緒に練習をする姿も見られる。また、『のんちゃん』（資料1-③）を通して、不明瞭な話し方をしているダウン症の主人公が、肝心なことは分かっていると友達が理解を示している姿が見て分かる。

器質的な要因だけではなく、ダウン症は知的障害を伴うことが多く、言葉や文字の習得に時間がかかる傾向も指摘されている。『のんちゃん』の一場面では、文字が少しずつ書けるようになる様子が描かれており、時間を要しても着実に成長していくことを伝えている。また、『となりのしげちゃん』（資料1-④）では、「しげちゃん」が、いつも遊んでいる友達の名前を呼べるようになった様子が紹介されている。誤解や必要以上の干渉を防ぐためにも、成長の様子が伝わることは重要であると言える。

## 2 ダウン症児・者と家族の心情を紹介する絵本

### （1）ダウン症児・者本人が抱える葛藤

Oxelgren U.W. et al. (2016) や Warner, G. (2014) は、アメリカやイギリ

スにおいて、6-18%のダウン症児が ASD を合併していることを報告している<sup>(14)(15)</sup>。ダウン症児に共通した性格特徴はないとされるものの、自閉的な傾向も相まってゆっくりと丁寧に物事を学び、一度身につけた順序を守ろうとするため、表面的には融通が利かないように映ることがある。表情と気持ちをうまく結び付けられないこともあるため、信頼関係と理解のある周囲の人が注意深く見守ることが重要になる。ダウン症児・者が抱える、この葛藤について物語の中で紹介した絵本がある。『となりのしげちゃん』(資料1-④)では、保育園で生活する様子が写真で伝えられている。その中で、友達に「やめて」と言えず泣いてしまうことや、時にはなかなか動かなくなってしまうことも紹介されている。

また、『のんちゃん』(資料1-③)でも、自傷行為や気持ちの切り替えの困難さが取り上げられている。給食当番では、おかずを配ることが好きで、お玉を手を持って離さない様子が描かれている。『ゆっくりって、いいな』(資料1-⑦)では、下校準備の時間になっても自分のペースで遊ぶ様子が紹介されている。これらの行動は、実際の集団生活の上では迷惑行為だと捉えられる場合がある。しかし、どの作品もその行為を個性として捉え、温かく見守る視点から描かれている。絵本を通して、見守ることの大切さを改めて感じることができる。

## (2) 明るく陽気な性格

ダウン症児・者の中には、表情が豊かで人と触れ合うことを好む人、困っている人を見ると世話を焼きたがる人、ひょうきんで茶目っ気がある人がいると言われてきた。また、人の注目を集めることを好む人がいることや、歌や踊りが好きな人もいる。『ゆっくりって、いいな』(資料1-⑦)では、算数の時間に角度を測る道具を使って踊り出す場面や、掃除時間の校内放送で音楽のリズムに乗って歩く姿も見られる。周囲の人の気分を和らげ明るくさせることが、ダウン症児・者のよさでもあると言われている。

さらに、『学校つくっちゃった!』(資料1-⑥)は、4人のダウン症児が、学校をつくる様子を写真で紹介した作品である。自由な発想で授業がつけられていく様子から、ダウン症児の魅力が伝わってくる。「学校」とは言っても、幼稚園や保育園で生活している幼児にとって身近な造形素材が多く登場するため、幼児が見て楽しむこともできると考えられる。写真からは4人のダウン症児が、それぞれに自分なりの楽しみ方や遊び方を持っていることが分かる。「ここがわたしたちの学校。いろいろなものがうまれるところ。きまっているのははじまりとおわりのじかんだけ」という自由な校風があり、ダウン症の特性を踏まえた教育の様子から、明るく陽気な性格が見て取れる。

## (3) ダウン症児・者の兄弟や家族の苦悩や喜び

『わたしたちのトビアス』(資料1-①)には、ダウン症の子どもを授かった家族の悩みと、子育ての喜びが描かれている。頻繁に使われる「ふつうの子」「ふつうでない子」という表現は、誤解や偏見を生じさせる危険性もあるが、障害について「よく知る」ことが大切であるという主張が明確である。『わたしたちのトビアス大きくなる』『わたしたちのトビアス学校へいく』等の続編があ

り、継続的に読めるのもよいが、これらは、文章量や内容から判断して、幼児には少し難解であると思われる。『わたしのおとうと、へん…かなあ』（資料1-⑤）には、弟の成長の遅さを心配する姉が、主人公として登場する。悩みを抱えて医師に相談した結果、「いまのまんまのドードくんを、すきにおなり。それがいちばん、たいせつなことだよ」というメッセージ性の強い言葉をもらう。姉が弟の成長ぶりを喜ぶ様子が見られるのもよさである。

『みらいちゃんのみらい』（資料1-⑩）は、日本人ダウン症児の胎生期から幼児期に至るまでの成長の軌跡が、保護者の温かく真摯な視線で描かれている。心配や苦悩にも勝る我が子の成長の喜びが描かれる中で、障害のあるなしに関わらない親の思いが伝わる作品である。保育現場で出会うダウン症児のこれまでの成長過程を理解し、保護者も含めた理解を深める絵本であると言える。同様に、『あいちゃんのひみつ ダウン症をもつあいちゃんの、ママからのおてがみ』（資料1-⑨）は、転校先の同級生に対する自閉症児の母親からの手紙を絵本にしたものであり、乳児期からのダウン症児の育ちの様子に加えて、新たな友達との出会いと関わりの中での学びと、それに対する保護者の思いが描かれている。保護者からの慈愛と感謝に満ちた親しみやすい語り口で表現されており、ダウン症児とその家族への共感と理解が促されるものである。

### 3 ダウン症児・者との関わり方を紹介する絵本

#### （1）運動面での困難さへの配慮

ダウン症児は、低緊張が故に身体が柔らかいような印象を受けることがあり、椅子に座る時に姿勢を保持することが難しく、姿勢が悪くなりがちであると言われている。療育として筋力を強化する運動をすることで、この特徴は目立たなくなることもある。また、動作がゆっくりになる場合がある。筋力の都合上、持久力が乏しいこともあるため、長距離の移動には配慮が必要である。手先を動かす力の加減が困難であるため、不器用になるとも言われる。

『のんちゃん』（資料1-③）は、ダウン症児に無理強いをさせないことの大切さが伝わるような工夫がなされている。山登りでダウン症児の手を引き、背中を押す周囲の友達の姿が描かれており、「のんちゃんは、すぐにへたばっちゃって、「オンブ」なんていうんだ。でも、ぼくが手をひいてあるいたら、さいごまであるきとおしたよ」という言葉が書かれている。

#### （2）評価基準の違い

障害のある子どもの場合、学習面において、定型発達児と同じ基準で測って評価をすることが難しい場合がある。『のんちゃん』（資料1-③）の一場面では、文字とは捉えられない記号を並べた日記に、花丸が付いている。定型発達児と障害児で、与えられる課題や評価の基準が変わってくることは、現実的にあり得ることである。『ゆっくりって、いいな』（資料1-⑦）でも、他の児童とは異なる課題に取り組む様子が紹介されている場面がある。自分とは違った基準で評価されることを、定型発達児はどのように感じるのだろうか。定型発達児が不平等感を感じないように、日頃から障害のあるなしに限らず、保育者や教師

には現状までの発達を十分に認めて評価する姿勢が求められるだろう。また、ゆっくり練習することや、工夫すればできるようになることが多くあるということは、多数の絵本で伝えられている内容である。「その障害児が得意なことや上手にできるようになったことをみんなの前で紹介する機会を作る」ことが、障害児への肯定的な理解につながると言われている<sup>(16)</sup>。

『のんちゃん』は、「何かが違う。どこか変だな」と感じる子どもの気持ちをそのままに描いている。また、「ぼくたちよりずーっと、ちいさい子にみえた」という印象についても書かれている。「何かが違う」と感じながらも、関わり方は自然であり、「いまでは、だれかが、のんちゃんにしげんに手をかしている」という言葉もある。この絵本では、ダウン症の否定的に捉えられがちな一面と肯定的な印象を与える一面が、交互に紹介されている。どこか違うけど、自分たちの仲間であるというように、障害児に対する幼児の感じ方を素朴に受け止めてくれる絵本として、受け入れやすいと推測される。

#### IV. 知的障害への理解を援助する絵本と指導の留意点

##### 1 知的障害に関する基礎的な事柄を紹介する絵本

###### (1) 知的障害の原因

知的障害は、染色体異常や中枢神経系の疾患等、様々な種類の障害と併発する場合があるため、原因を一括りにはできない。一例を挙げるだけでは不十分であるが、知的障害の原因について触れられている絵本がある。『こわいことなかああらへん』(資料2-③)は、作者の次男の視点から描かれた作品である。この絵本では、登場人物が生後100日頃に高熱を出し、それが下がらなかったことが原因で知的障害になったと説明されている。児童文学作品を対象にして探せば、多くの作品が見つかる可能性があるが、幼児が理解できるような絵本には、知的障害の原因を扱ったものは少なかった。

###### (2) 知的障害の状態像

発達が緩やかな場合のある知的障害児の状態像は、幼児期においては言語機能の遅れという形で顕在化することが多く、外見は他の幼児と変わらない。これは、身体障害や、前述したダウン症と比べた相違点である。他の幼児にとって、知的障害児の話すことが苦手であったり、言葉による保育者の指示が伝わりにくかったりする姿は、外見が同じなのにどうして自分たちと異なる行動を見せるのか疑問を生じさせることもあるだろう。目に見える障害でないことが、幼児の障害理解を困難なものにする可能性がある。『みんなとおなじくできないよ 障がいのあるおとうととボクのはなし』(資料2-⑩)は、知的障害児の兄の視点から、弟の知的障害の状態像が詳細かつ具体的に述べられ、その背景や解釈が示唆されている。当初は弟の行動に否定的な思いを抱いていた兄が、物語の進展に伴って弟の姿や内に秘めた思いを受容し、他の幼児と異なる多様性の中で弟を肯定的に捉え直す物語は、知的障害の状態像を示し、その理解を促すものである。



### （3）知的障害に対する偏見の防止

知的障害者の中には、才能を発揮して作品をつくり出す人がいる。『みなみの島へいったんや』（資料2-④）は、重度知的障害者の支援施設である止揚学園の子どもが初めてシンガポールに旅行をした時のことを、貼り絵と詩で紹介している。旅の思い出を描いているのみであるが、見事な貼り絵によって構成されている。

また、『おしゃべりな絵日記』（資料2-⑤）も『みなみの島へいったんや』と同様に、知的障害児の作品集のような絵本である。作品を見ることが直接的な理解につながるわけではないが、知的障害者も自分と同じように、絵を描くことを楽しんでいるという事実を知ることができる点に意味があると考えられる。

## 2 知的障害児・者と家族の心情を紹介する絵本

知的障害児・者の心情を周囲の友達が想像しているような語り口で描かれた絵本がいくつか存在する。ここでは、『ボスがきた』（資料2-①）に登場する主人公の言葉から、その状況や心情を考える。知的障害のある主人公は、小さい時に遠くから学園に来た犬の「ボス」と、幼い時に親元を離れて止揚学園に来た自分の姿を重ねている。親元を離れた施設で生活する知的障害児がいるのは事実である。ボスが亡くなった後、天国にひとりぼっちでいるボスのことを想像しながら、主人公は、「ぼくかて、ひとりぼっちだったら、さびしい」と言っている。この絵本の読み聞かせを通して、施設で暮らす知的障害児の存在に気付くことができ、そのような立場の子どもの気持ちを知る契機となる。

『みんなとおなじくできないよ 障がいのあるおとうととボクのはなし』（資料2-⑩）は、エピソードを通じた兄弟（家族）の苦悩を描きながらも、他者と同様にできないことを単に否定的に捉えず、多様性として受け止めることが描かれている。さらに、兄弟もまた障害のある兄弟を理解し、受容する過程と、その重要性が述べられ、その支援に対する示唆を与えるものである。

## 3 知的障害児・者との関わり方を紹介する絵本

### （1）反面教師な関わり方から学ぶ

知的障害児・者との関わり方について描いた絵本では、彼らに対して、交流に消極的な登場人物の姿が目立った。例えば、『こわいことなんかあらへん』（資料2-③）は、作者の次男の視点でつくられた絵本である。障害者に対して、「こわい」「きたない」と言って、逃げる人がいる場面では、「ぼくが、いわれたら、いややなあ」という語り手の気持ちが書かれている。同時に、「みんなだって、「いっしょに学校こんといて」といわれたら、いややろう」と読み手に語りかける言葉もある。反面教師のような立場の絵本であり、相手の立場に立つことの大切さを教えてくれる。この絵本の最後には、色々な子どもがいることを、分かりやすい言葉で描いている。知的障害者に対する感情として過激な表現もあるが、この絵本を通して、色々な人がいて当然であるということを知ることができればよい。

また、『みんなみんなぼくのともだち』（資料2-②）は、作者の長男の視点から描かれている。「アホとあどぶとアホになるから、あそんだらへん」という周囲の子どもの言葉がある。しかし、それに対して、知的障害のある学園の友達の良いところを挙げて、みんな優しい心をもっていることが説明されている。そして、「アホになるから、あそんだらへん」という友達は、「この子どもたちのことが、わからへんのや」という主人公の思いも表現されている。一緒に過ごす中で、見えてくること、分かるようになることがあるということが読み手に訴えられている。

ここで挙げた止揚学園シリーズの問題点は、「ちえおくれ」という言葉が繰り返し使用されていることである。これらの絵本が出版されたのは、30年以上前であるが、現代は「知恵遅れ」という表現が控えられている。幼児にとって聞き慣れない言葉であるため、幼児が言葉の意味を尋ねてくることが推測される。分かりやすい説明で、誤魔化すことのないように備えておかななくてはならない。

## （2）否定的な感情を認めること

障害児・者に対して、「こわい」「きたない」という感情を抱くことは残念なことであり、本来ならあってはならない。しかし、幼児がそのように感じる感覚自体を完全に否定してしまえば、障害に対する否定的な感情が歪んで残ることになる。『のんちゃんはおとうぼんです』（資料2-⑦）の主人公も、知的障害のある「とおるくん」と一緒にお当番をすることを嫌がって、こっそりとお当番カードをめくってしまう。しかし、結局は、とおるくんと一緒にお当番をすることになる。園外の散歩では、当番として先頭に立ち、とおるくんのペースに翻弄されながらも、楽しく冒険をする物語である。物語性があり、幼児の視点から描かれているため、読みやすいのが利点である。この絵本の特徴は、話の途中で、とおるくんの涎に関する描写が繰り返されていることである。最初の場面では、主人公は涎が垂れて嫌だと思ふこと、それを何事もなく拭き取る先生の姿が描かれている。最後の場面では、主人公がティッシュを渡してあげるようになる。しかし、それでも、涎が垂れると、思わず手を引っ込めてしまうことも描かれている。否定的な感情が封じられることなく表現されている作品もあることが分かる。重要なのは、その表現を幼児と共に受け止める保育者の支援のあり方である。障害とその状態像の描写によって、読み聞かせを受けた幼児においても、否定的な感情が生じることが考えられる。保育者は、それを受容しつつも、どのように対応したらよいかを幼児と共に考えたり、示唆を与えたりするなどの支援が求められる。

## V 総括と今後の課題

ダウン症や知的障害に関する絵本は、近年も出版されており、障害そのものに対する理解にとどまらず、障害者やその保護者・兄弟の理解と支援にもつながる教材である。エピソードを通じた障害の事例の描写や感情表現による具体的な表現は、幼児にとっても親しみやすく理解しやすいものと考えられる。し

かし、障害の実態は全体的な傾向は同一であっても、具体的な状態像は一人一人異なる。幼児が実際に出会う障害児の実態と絵本の描写に差異があることが予想される。幼児と教材を媒介する保育者には、幼児の障害理解の個別的かつ具体的な深化を促すための支援が求められるだろう。

本研究では、障害理解教育の教材として幼児にとって身近な文化財である絵本を活用する有用性及び妥当性について検討した。障害は障害児・者に内在するだけでなく、他者や社会との間にも存在するものである。それを低減したり除去したりしようとするのがノーマライゼーションやバリアフリー、ユニバーサルデザイン等に通底する考え方である。障害児・者と他者の間にある障害は、それらの関係性を描き出すことによって、分かりやすく示すことができる。絵本は、物語を通じて、具体的なエピソードやその中のコミュニケーションを描くことで、複数の登場人物との関係性を示すことができる。障害の状態像の具体例を、障害児・者と他者との関わりの中で描くことが可能である。登場人物の描き出す物語は、障害に関する多面的な気づきと学びを幼児に与えると考えられる。幼児は、作中の障害児・者と他者との関わりを通して、自らの周りにいる彼らへの理解を深めたり、コミュニケーションのあり方を考えたり、自らの行動を顧みたりすることができるだろう。それを援助するのが保育者の役割である。

また、本研究では、様々な障害を主題とした絵本を調査、分類し、保育者が障害理解教育に活用する際に絵本を選択しやすいよう絵本リストを作成した。絵本を選択する際には、科学的な理解の観点から、障害自体の説明、原因の説明、症状の説明、障害児・者の生活の様子、接するとき配慮すべきこと等が、幼児にとって分かりやすく描かれているものが望ましいと考えられる。また、情緒的な観点から、障害児・者に対する寛容な態度や理解、彼らの悩みや苦勞が過度でない程度に示されているもの、幼児にとって身近な内容で、親しみやすい工夫がされているもの等が望ましい。さらには、絵本の登場人物が、周囲の障害児・者に対して疑問を抱くような作品も重要であると考えられる。なぜなら、障害を主題にした絵本の読み聞かせには、幼児の疑問を解決して、誤解を防ぐ機能もあると期待されるからである。その点で、絵本に使われている絵や言葉が、誤解を招くものではなく、幼児にとって受け入れやすいものかどうか注意深く検討しておく必要がある。さらに、幼児が一人でも読めるものも理想的である。そのためには、使用されている漢字に振り仮名がついていたり、文章量も考慮されていたりする必要があるだろう。今回リスト化した絵本は、全体的に小学校低学年で習う程度の漢字が使用されているものが多かった。読み仮名が振られているため、幼児が読むことも可能ではあるが、平仮名のみを使って書かれた、より分かりやすい絵本の選択が望まれる。

保育現場では、絵本を選ぶのも、読み聞かせをするのも、基本的には保育者である。集団での読み聞かせでは、保育者が幼児に何を伝えたいか、どのようなことを感じて欲しいかを検討して、指導に当たることが重要である。幼児の年齢や発達過程に合わせて適切な絵本を選択し、疑問を解決しながら、障害に

関して誤った認識を持つ危険性を下げるのが、保育者の役割であると考え。幼児は、まだ詳しく知らない物事について知ろうとする時、自分の理解が正しいかどうかを確認するように、保育者に尋ねることがある。その質問の中に、障害に関して未知が故の偏見や誤解が含まれていたとしても、急いで注意をする必要はない。なぜなら、幼児の質問には、幼児がその物事に興味関心を持っているという事実があるからである。その点を重視して、障害理解を促進することが重要である。柳澤(2007)は、「まだ幼いから障害に付いて説明する必要はないとするのは誤りである。率直な疑問を抱く幼児であるからこそ、彼らの疑問にいていねいに応え、障害に対して歪んだ印象をもたないように説明することが重要である」<sup>(17)</sup>と述べている。絵本の読み聞かせにより、障害のある人の行動傾向を教えることが第一の目的ではない。幼児が周囲にいる障害児・者について疑問に思った時に、そのような人も世の中に存在しているということが納得できる契機になればよいと考える。関心を持つことで、理解が進む可能性がある。

障害について描かれる絵本は、障害者への肯定的な理解を促進することを目指してつくられていることが多く、物語の中の障害児・者と周囲の人物は、友好的に描かれることが多い。しかし、絵本によっては、彼らが辛い思いや悲しい経験をする場面が強調されている物語もある。そのような場面を幼児が、どのように捉えるかということも、幼児の発達過程を考慮しながら、保育者が検討し、どのように幼児に理解を促すのかを考えておくことが必要だろう。

絵本を読み聞かせたからといって、絵本の登場人物と同じような支援行動を、突然幼児に求めることは難しく、適切ではない。まずは、保育者が適切な関わりを示し、その関わり方の理由を知って納得できるようにすることが肝要である。また、幼児の誤解や偏見が生じるよりも前に、障害のある人が劣った存在ではないことを積極的に伝えなければならない。

障害理解教育において絵本を利用する際に、常に保育者が留意すべきことは、それぞれの絵本が示す障害児・者の状態像は、実際の保育現場にいる一人一人の障害児のそれと、全ての点で一致することはないということである。障害児・者が描かれた絵本は、それぞれの障害に見られる一般的な事例や、実話に基づく個別的な事例が示され、それらは障害理解に役立つものである。しかしそれは、あくまでも一例である。それを基礎的な知識や知見としながらも、先入観や固定観念として過度に囚われることなく、眼前にいる彼らの背景と状態像に根ざした理解と支援を行うと同時に、他の幼児の実態に合わせて共感と理解を促すように援助を行うことが求められる。

また、障害理解の援助の先に保育者が目指すべきものは、幼児が、障害のあるなしにとどまらず、他の幼児一人一人の多様性を受容できるように支援し、共生の姿勢を育むことである。障害理解に基づいた障害児・者との共生の経験は、幼児にとって多様性を認める原体験の一つとなり、その生涯において、障害だけでなく性別、国籍、宗教、文化等の多様性(ダイバーシティ)を受容し、他者と共生するインクルーシブ社会を生きるための基盤を形成する可能性があ

る。さらに、2015年の国連サミットにおいて採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」に、日本は積極的に取り組んでおり、ここで重視される多様性や包摂性への理解は、障害理解教育を通して促すことができると考えられる。インクルーシブ保育の視点を持ちながら、障害理解教育を進めることが重要であり、絵本はその教材として有用である。

本研究の目的は、幼児の障害理解を促す絵本について、現時点で出版されている絵本を整理することで一覧表を作成することである。その成果を基に、保育者は絵本を選択し、どのような障害理解指導をすることができるのかを検討することができる。実践につながる環境整備をすることで、幼児期からの障害理解教育が、より教育効果の高い充実したものになること、今後も求められる幼児期からの障害理解教育の取組が促進されることを期待する。

今後は、絵本リストを更新しながら、それがより実用的なものとして保育現場で活用できるよう普及させることを課題とする。その過程において、現場でそのリストを利用する保育者からの意見・提案を受けながら、分類の工夫や追加項目の検討など、現場実践に資する教材としての精度や信頼性を高めることが求められるであろう。

資料1. ダウン症への理解を援助する絵本

書名	作者及び訳者	出版社	出版年	内容
①『わたしたちのトビアス』	セシリア・スベドベリ／編，トビアスの兄弟／絵，山内清子／訳	偕成社	1978年	ダウン症の原因 22×16／52頁 実話・漢字
②『しろいくに』	田島 征三／文，村田清司／絵	偕成社	1991年	ダウン症との関わり 23×22／36頁 半創作
③『のんちゃん』	ただのゆみこ／作	小峰書店	1996年	ダウン症との関わり 25×22／29頁 創作・漢字
④『となりのしげちゃん』	星川ひろ子／写真・文	小学館	1999年	ダウン症との関わり 21×23／36頁 実話・写真・漢字
⑤『わたしのおとうと，へん…かなあ』	マリ＝エレヌ・ドルバル／作，スーザン・パーレイ／絵，おかだよしえ／訳	評論社	2001年	ダウン症の生活 21×11／47頁 創作・漢字
⑥『学校つくっちゃった！』	エコール・エレマン・プレザン，佐藤よし子・佐久間寛厚／編	ポプラ社	2006年	ダウン症児の生活 23×24／32頁 実話・写真・漢字
⑦『いっしょがいいな障がい絵本④ゆっくりって，いいな』	北村小夜／監修，嶋田泰子／文，坂本真典／写真	ポプラ社	2006年	ダウン症児の生活 25×24／55頁 実話・写真・漢字
⑧『マルコとパパ ダウン症のあるむすことぼくのスケッチブック』	グスティ／作，宇野和美／訳	偕成社	2018年	ダウン症との関わり 25×19／145頁 半創作
⑨『あいちゃんのひみつ ダウン症をもつあいちゃんの，ママからのおてがみ』	竹山美奈子／取材・文，えがしらみちこ／絵，題字／小嶋愛	岩崎書店	2020年	ダウン症の原因，ダウン症との関わり 28×24／33頁 実話
⑩『みらいちゃんのみらい』	にしかわしずよ／作，たなかあい／絵	文芸社	2020年	ダウン症児の生活 19×23／24頁 半創作

資料2. 知的障害への理解を援助する絵本

書名	作者及び訳者	出版社	出版年	内容
①『ボスがきた』	たけうちまさき／絵，まじまかつみ／字	偕成社	1980年	知的障害児の心情 26×21／35頁 半創作・漢字
②『みんなみんなぼくのともだち』	福井達雨／編，福井義人／文，高田真理子／絵・字，竹内雅輝・堀晋輔・馬嶋純子／絵	偕成社	1980年	知的障害児の紹介 26×21／49頁 半創作・漢字
③『こわいことなんかあらへん』	福井達雨／編，馬嶋克美／絵・字	偕成社	1981年	知的障害児の紹介 26×21／51頁 半創作・漢字
④『みなみの島へいったんや』	福井達雨／編，止揚学園の子ども／作，馬嶋克美／字	偕成社	1982年	知的障害児の作品 26×21／ 創作・貼り絵・漢字
⑤『おしゃべりな絵日記』	アトリエエレマンプレザン／編	ポプラ社	1997年	知的障害児の作品 25×25／38頁 作品集・漢字
⑥『ぼくのおにいちゃん』	星川ひろ子・星川治雄／作	小学館	1997年	知的障害児の生活 21×23／36頁 実話・写真・漢字
⑦『のんちゃんはおとうぼんです』	今関信子／文，垂石真子／絵	童心社	1999年	知的障害児の生活 20×18／40頁 創作・漢字
⑧『あなたとわたしわたしとあなた』	谷口奈保子／文，寺澤太郎／写真	小学館	2012年	知的障害者の生活 18×17／59頁 実話・写真・漢字
⑨『ぼくらのバトン（みんなでかんがえようしまだよこのえほんシリーズ）』	しまだようこ／作	今井出版	2020年	知的障害児の生活 18×26／34頁 半創作
⑩『みんなとおなじくできないよ 障がいのあるおとうととボクのはなし』	湯浅正太／作，石井聖岳／絵	日本図書センター	2021年	知的障害児の生活 26×18／32頁 実話

### 参考・引用文献

- (1)徳田克己：「基本的事項」、『障害理解 心のバリアフリーの理論と実践』，9頁，誠信書房，2005年。
- (2)山口（西岡）由稀，浅野泰昌，馬場訓子：「幼児期の障害理解教育における絵本の教材化と指導の課題」、『岡山大学教師教育開発センター紀要』13，373-387頁，2023年。
- (3)浅野泰昌，山口（西岡）由稀，馬場訓子：「幼児の身体障害への理解を援助する絵本教材」、『岡山大学教師教育開発センター紀要』13，389-403頁，2023年。
- (4)全国保育団体連絡会・保育研究所（編）：『保育白書 2023年版』，180頁，2023年。
- (5)浅野ほか・前掲論文(3)
- (6)浅野ほか・前掲論文(3)
- (7)篠原広志：「1次絨毛形成の正常化はダウン症候群の治療標的に成り得るか？」『ファルマシア』55(7)，703頁，公益社団法人日本薬学会，2019年。
- (8)American Psychiatric Association: Diagnostic and statistical manual of mental disorders 5th edition (DSM-5). Washington, DC: American Psychiatric Publishing, 2013.

- (9) 文部科学省：『特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（小学部・中学部）』，開隆堂出版，2018年。
- (10) 徳田・前掲書(1)：30-33頁。
- (11) 野末由紀子：「ダウン症児における構音障害とその要因に関する文献研究」，『生涯発達心理学研究』12，41-47頁，2020年。
- (12) 石田宏代：「ダウン症児の発語の明瞭さと音韻意識の関連」，『特殊教育学研究』36（5），17-23頁，1999年。
- (13) 野末・前掲論文(11)
- (14) Ulrika Wester Oxelgren, Åsa Myrelid, Göran Annerén, Bodil Ekstam, Cathrine Göransson, Agneta Holmbom, Anne Isaksson, Marie Åberg, Jan Gustafsson, Elisabeth Fernell: “Prevalence of autism and attention-deficit-hyperactivity disorder in Down syndrome: a population-based study” *Dev Med Child Neurol* 59(3):276-283. 2016.
- (15) Warner G.: Autism characteristics and behavioural disturbances in ~ 500 children with Down's syndrome in England and Wales. *Autism Res.* 7:433-41. 2014.
- (16) 水野智美：「障害理解教育・活動の実際」，（徳田克己/編：『障害理解 心のバリアフリーの理論と実践』），220頁，誠信書房，2005年。
- (17) 柳澤亜希子：「障害理解教育の意義と方法」，（大沼直樹，他/編：『特別支援教育の基礎と動向[改訂版]新しい障害児教育のかたち』），211頁，培風館，2007年。

---

Picture Book Materials to Support Infants to Understand Down Syndrome and Intellectual Disabilities

ASANO Yasumasa\*1, YAMAGUCHI (NISHIOKA) Yuki\*2, SETOYAMA Yu\*3, BABA Noriko\*4

Picture books on Down syndrome and intellectual disabilities should be further improved, to understanding not only the disabilities but also the disabled and their parents and siblings through stories. Furthermore, caregivers need not only to read picture books to infants, but also to provide support such as approach and encouragement to deepen individual understanding of infants with disabilities. A picture book list developed in this study is intended to assist caregivers in selecting picture books and to provide guidance in understanding disabilities. Future issues are to examine the practical application of the list in childcare and to test its validity in cooperation with caregivers. In addition, because of the usefulness of education for understanding disabilities from early childhood, there is a need for more picture books on these topics for infants.

Keywords: Early Childhood, Education for understanding disabilities, Down Syndrome, Intellectual Disabilities, Picture Book

\*1 Department of Early Childhood Education and Care, Kurashiki City College

\*2 MINAN Certified Centers for Early Childhood Education and Care

\*3 Faculty of Childhood Education, Kurashiki Sakuyo University

\*4 Faculty of Education, Okayama University

---